

ケニア拠点 齊藤准教授からのコメント

ー 熱研内科と海外拠点（ケニア・フィリピン）との連携 ー

感染症は国境を越えて拡がり、世界的な脅威となる。特に新興感染症の多くは、**世界的に脅威となる感染症が発生しやすい熱帯地域**で多く報告されている。これらの地域は高温多湿で、蚊などの媒介動物が多く、人と動物の接触も頻繁であるため、スピルオーバー感染症が起こりやすい。実際、熱帯地域から世界へと広がり、パンデミックや大規模流行を引き起こした感染症は少なくない。マラリアやデング熱に加え、エボラ、ジカ、さらには COVID-19 など、その深刻な影響を私たちに残してきた。

“このような状況で、日本の感染症科医は国内だけを見ていてよいのだろうか？”

→ いいや、決してそうではない。



日本の感染症科医が国民の健康を守るためには、国内の臨床現場だけでなく、**熱帯地域で流行する感染症にも精通していることが求められる**。しかし、日本では熱帯感染症を実際に経験する機会が圧倒的に少なく、教科書的な知識にとどまりがちである。

そこで我々は、長崎大学の強みである海外拠点（ケニア・フィリピン）を活用し、日本の若手感染症科医が熱帯地域で診療・研究を経験できる場を提供している。

単なる見学ではなく、現地で感染症対策に主体的に取り組み、課題を自ら発見し、解決へ導く力を養うことを重視している。さらに、その過程で臨床現場の疑問を科学的に検証し、研究として発展させる力を培うことも重要である。こうした研修を通じて、臨床能力に加え、語学力、現場対応力、疫学・公衆衛生の知識、そして研究遂行

力を実践的に身につけた医師・研究者を育てることを目指している。これこそが、今後日本の感染症医療と研究を支える人材像である。



私は現在、ケニア拠点准教授／副拠点長、そしてフィリピン拠点学術委員として、これらの拠点運営を担っている。長崎大学 熱帯医学研究所・熱帯医学グローバルヘルス研究科の海外拠点を最大限に活用し、熱帯地域で臨床研究を実践できる感染症科医を育てることが私の使命である。

熱研内科と緊密に連携しながら、現地の課題に根ざした研究と人材育成を推進し、世界で活躍できる感染症科医の育成に努めていきたいと考えている。